



Title	道の途中で : 島めぐり (続き)
Author(s)	大貫, 惇睦
Citation	大阪大学低温センターだより. 2017, 167, p. 29-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/62132
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

道の途中で 一島めぐり（続き）

琉球大学理学部 大貫 惇睦*

E-mail: onuki@phys.u-ryukyu.ac.jp

芭蕉の「奥の細道」の英語訳は「Narrow Road to the Deep North (Country)」だそうです。沖縄のディープなところは何と言っても西表でしょう。それも船浮集落が最もディープなところのようです。昨年西表に行ってきました。那覇から飛行機で石垣に行き、石垣から船で1時間の西表の上原港に着き、それからバスに1時間乗って終点の白浜港に、更にそれから船に乗ってようやく目的地の船浮に着きます。1日かかりのハードな旅でした。石垣から西表までのフェリーで通り過ぎてゆくいくつかの島々はお皿をひっくり返したような平らな島ですが、西表はまさにジャングルです。海岸沿いのわずかなところにポツンポツンと集落があり、道路沿いに田んぼが目につきました。沖縄本島では田んぼはほんの少しあるようですが日頃目にすることはありません。西表では年に3回収穫しているようで、春収穫のお米は食べましたが味はマアマアでした。

さて、民宿に荷物を置いて、あたりをぶらつきました。近くに小・中学校があり、父親が小学生の子供に自転車の乗り方を指導していました。話しかけてみると、その方は先生で、小・中学校の在校生は全部で6人、その中の4人は先生方のお子様だそうです。大丈夫ですかとつい聞いてしまいました。最近子供を2人持つカップルが外から移住してきたので心配はないでしょうというおだやかな返事がかえってきました。夜はつりを楽しむ東京あたりからのリピーターで盛況でした。このあたりは昔は石炭の採掘で栄え、民宿の池田さん宅は明治に九州から渡って来たとの宿のおかみさんの話しでした。歌手の池田卓さんの実家でした。

その夜出た食事はおそらくごちそうなのでしょう。宿のご主人が獲ってきたというイノシシの肉がしかも毛の生えた生肉が皿にのっけて、真黒なイカ墨のお汁がどんぶりになみなみとありました。もちろん、他にもイカのサシミや小魚のから揚げ等もありました。どうもそのまま食べるようで、ワイルドだなあと思いつつおそろおそろ食べました。イカ墨のお汁も真黒なので、多少のたじろぎもありましたが、イカのゲソをかみしめながら、すっかりいただきました。しかし、その夜キリキリと腹が痛み、トイレにかけ込むことになりました。その後の脱力感は生涯忘れることがないでしょう。家に帰ってから、家内が近所の方に聞いたところ、イカ墨のお汁は便秘ぎみになった妊婦が昔は飲んだとのことでした。

前号で西表について書いたのですが、このような“下痢”で島めぐりを結ぶのはなんとも申し訳ないと考え、本号にまわした次第です。西表では米作りが昔と変わらず行われていることを書きましたが、沖縄本島で田んぼがあるのは、中部に位置する金武町（きんちょう）ぐらいでしょうか。もう一つ私が最近知ったのが”伊平屋”島です。伊平屋（いへや）、野甫（のほ）、伊是名（いぜな）

*大阪大学名誉教授

は本島最北部の離島で、鹿児島県の与論島近くです。名護の北の今帰仁村（なきじんそん）の運天港からフェリーで1時間20分かかります。何となくすぐそこと思い込んでいたのが間違いで、意外に遠く、フェリーの座敷で寝転がっているうちに、ひとねむりした次第です。訪れた時期は11月下旬のスーパームーンの2日前でした。これらの島は沖縄を統一した尚氏の祖先が住んでいた島として知られています。

自転車に乗ってのんびりと、細長い伊平屋島の中央付近から橋で繋がっている野甫の小・中学校に向かって研究の友と出かけました。村落があるのはわずかな地域で、そこに稲を収穫したあとの田んぼがありました。確か港では地元産のお米が販売されていました。さて、海岸沿いの1本道なので、目新しいものは全くなく、左手は海、右手は小高い山がただただひたすら続きます。一つの大きな驚きはダムが建設されていたことです。沖縄には意外にダムや貯水池が多いのです。降水量は本土より多いのですが、多くの雨は海に流れ、山も少ないせいか貯水されないのです。したがって川もほとんどありません。1時間ぐらいかかったでしょうか、ようやく前方に伊是名が見え、橋を渡って野甫に着きました。小・中学校の隣に”塩”を販売する”塩の博物館”のようなところがあり、そこでひとときを過ごしました。

行きは日差しが強くむし暑かったのですが、帰りは日没寸前のたそがれ時です。涼しい風がほほを撫ぜ、なんとも気持ちが良いのです。天空には大きな月があり、私達を照らしていました。栃木県という海のない県に育った私には、月と海のコントラストがとても印象的です。その夜、次のような昔口づさんだ歌の一節「星影さやかに静かに更けぬ・・・今日の一日の幸 静かに思う」を思い出しました。



月の光の中を